

日韓文化交流基金 NEWS

2018.9.25 No. **87**

Contents

- 1 基金賞**
第19回日韓文化交流基金賞 受賞者決定
- 2-3 基金講演会**
「両班幻想—韓国近世史の現場を歩く」
東京大学名誉教授、放送大学名誉教授 吉田 光男
- 4-5 新時代支援プログラム**
2017年度日韓新時代支援プログラム
研究テーマ「日本の震災復興学と現場力」について
高麗大学校グローバル日本研究院教授 金映根
- 6-7 研究者エッセイ**
「フィールドワークと文化交流」東京大学名誉教授 伊藤 亜人
- 8-9 交流エッセイ**
2017年度教員訪韓団、大学生訪韓団参加者感想文紹介
「気持ちを通じることの喜び」教員訪韓第2団参加教員 小倉 愛未
「訪韓を通して学んだこと」大学生訪韓第1団参加学生 出石 佑樹
- 10-11 事業報告**
青少年交流事業
理事会・評議員会開催
2017年度賛助会員リスト
- 12 公募事業**
2018年度 韓国との間の招へい・派遣事業
実施団体選定に関する採用案件一覧
2018年度 知日・知韓家育成事業採用案件一覧



第19回日韓文化交流基金賞 受賞者決定

日韓文化交流基金では、学術・文化分野の交流を通じて日韓両国の友好親善に寄与した韓国の方の功績をたたえるため、1999年より「日韓文化交流基金賞」を設け、毎年表彰を行っています。本年は、下記の3名に9月19日にソウルで開催された贈呈式にて、賞を贈りました。

受賞者プロフィール



李康民 (イ・ガンミン)
漢陽大学校日本学科教授、日本
学国際比較研究所所長

韓国を代表する日本関連学会の一つである韓国日本学会の会長等を歴任され、長きにわたって韓国における日本研究の発展・深化に貢献してこられました。また、日韓両国の有識者会議である「日韓・韓日文化交流会議」(第3期)においては韓国側事務局長として、会議運営をはじめ、フォローアップ事業である日韓合同舞台芸術公演の実施(これまで6回開催)にも尽力される等、両国の文化芸術交流の促進、韓国における日本理解の増進にも大きく寄与されています。



朴承柱 (パク・スンジュ)
大邱ハル 代表

大学での講義と共に、学生、教員、日本人留学生らが参加する交流事業や中高生を対象とした日本文化講座等を幅広く実施し、大邱・慶尚北道地域における日韓交流、相互理解の促進に大きく貢献されてきました。代表を務める日韓交流センター「大邱ハル」は、多様な交流イベントの他、日本への留学希望者へのアドバイス、日本人観光客ならびに在留邦人への諸情報の提供を行う等、同地域の日韓交流の拠点として、たいへん大きな役割を果たしています。



申尚穆 (シン・サンモク)
コラムニスト、きり山本陣 代表

外交官としての体験に基づいて日本の文化・歴史を紹介する多彩な執筆活動を展開しており、日本の江戸時代の文化・経済を多角的に解説した単著や、日刊紙および総合月刊誌上でのコラムの連載を通じ、韓国社会の日本文化・歴史に対する理解の増進に大きく寄与されています。

また、「日本うどん」専門店のオーナーとして、ソウルの中心街に店舗を構え、日本の食文化の魅力を韓国社会への伝播にも貢献されています。



両班幻想 — 韓国近世史の現場を歩く

東京大学名誉教授／放送大学名誉教授／日韓文化交流基金評議員 吉田 光男

今年度第1回目として、7月12日に開催された基金講演会「両班幻想—韓国近世史の現場を歩く」（講師：吉田光男さん）の内容をご紹介します。

●両班（ヤンバン）とは何だろうか

韓国近世の社会や文化を考えるうえで最も重要な言葉として理解されているのが両班です。人気の高い韓国の歴史ドラマでも主人公の多くは両班あるいはその関係者たちです。しかし、現代の韓国でも日本でも、その意味がかならずしも正確に把握されておらず、韓国の歴史や伝統に対する誤解を生み出す原因ともなっているのは大変に残念なことです。

私は1970年代初めから、朝鮮時代（1392～1896）の歴史資料と現代に生きる両班たちの末裔に関する現地調査を融合して、韓国伝統社会における両班とは何者かということを考えてきました。そこでもっとも重要なキーワードは「学」と「士」という二つだということに気が付きました。「学」は儒教や中国古典に対する知識であり教養です。それを身に付け実践に活かすことのできる人が「士」です。「学」を家業とする一族を士族と言いました。



講師の吉田光男さん

●本来の両班に関する三つの幻想

もともと両班とは、朝鮮時代に先立つ高麗時代（918～1392）に中国から入ってきた言葉で、本来は文武官僚を意味しています。文官が文班、武官が武班と呼ばれ、両者を合わせて両班というわけです。現代の言葉に直せば、国家官僚という意味になります。それが現在では、朝鮮時代からの名門という意味を持つようになっているのです。そこで少し過激な言い方をすれば、両班に関して三つの大きな幻想が生まれているようです。第一は、韓国伝統社会の最高身分は両班であるという幻想です。一般に、朝鮮時代の人々は両班、中人、常民、賤民（奴婢）という四つの身分に分かれており、その中で最高の位置にあるのが両班だというように理解されています。第二

は、韓国伝統文化の体現者あるいは根幹を担う者は両班であるという幻想です。そして第三は、ほとんどの韓国人が両班の子孫であるという幻想です。これらの幻想は、歴史や文化を理解する上で少なくない誤解を生み出しています。



本来の両班とは何か、そして時代が変わるにつれて、人々の中でどのように変化していったかについてお話させていただきました。

●両班は国家官僚のこと

第一の幻想について言えば、朝鮮時代に両班と呼ばれたのは文武の国家官僚でした。官僚になるためには、儒学や中国古典に関する高度な学識を持ち、国家試験である科挙に合格することが正統な道でした。科挙のうちとくに高級官僚の登竜門である文科大科の試験は、3年ごとに行われ、最終合格定員は33名でした。1年平均だと11名に過ぎません。朝鮮時代後期になると、定期試験の他に特別試験が頻繁に行われたので、年平均で30名ほどが合格することになりますが、それでも極めて狭き門であることに変わりはありません。中国から入ってきた儒教テキストの四書（大学、中庸、孟子、論語）と中国古典の五経（詩経、易経、書経、春秋、礼記）を中心として、儒教（朱子学、性理学）の学識を身につけていることが合格の条件でした。両班というのは、世襲的な身分ではなく、「学」の修得という努力の結果手に入れた国家官僚という職であり地位でした。しかも、いったん両班になっても、退職したり罷免されたりすれば両班ではなくなってしまいます。

●士族から両班が生まれる

科挙に合格して両班になるためには、長い間の勉強が必要でした。これは誰でもできたわけではありません。それだけの条件を備えていたのは、地主として経済的・社会的な支配層を形作っていた士族（士大夫、読書人とも言われました）です。言わば知識人たちです。この士族から両班が生まれました。士族は朝鮮時代のエリートであり、農村では最上位の階層として支配権をふるっていましたが、朝鮮時代の末期になると、その士族と両班の混同が起きます。18世紀末の学者朴趾源が、小

説『両班伝』の冒頭で「両班とは士族の尊称なり」と言っているように、朝鮮時代後期には、両班は士族を尊敬した呼称になっていました。官僚でなくとも、士族家系に属していれば両班と呼ばれるようになっていきました。ここに現在の韓国人総両班末裔状態の出発点の一つがみられます。偽物であれ両班（実は士族）の一員となった人たちは、儒教文化を我が物だと思ふようになり、韓国伝統文化の根幹だと認識するようになったというのが実状なのです。両班と士族は分けて考える必要があります。

●両班・士族と韓国伝統文化

第二の幻想について言えば、たしかに韓国伝統社会の高級文化という意味では、士族や両班たちが支えていたことは否定できません。しかし、一口で伝統文化と言ってもその内容は多様です。人口の大部分を占める庶民たちは、儒教とは異なる土俗的な世界に生きており、自分たちの文化を作っていました。人口数を基準にして見ると、土俗的な文化こそ主流で、儒教文化は傍流ということになります。だが、両者は排除し合うものではなく、入り交じっていました。それが韓国伝統文化ということになります。儒教も韓国伝統文化の一部だと言えばよいでしょう。



長年の研究生生活で収集された歴史的に貴重な史料も見せていただきました。

●韓国人総両班末裔現象

第三の幻想で言えば、現在、多くの韓国人が両班の子孫だという意識を持っていることです。韓国では5年ごとに国勢調査が行われており、その中で1985年、2000年、2015年には特別に姓氏と本貫（一族の始祖発祥の地）の調査が行われました。姓と本貫が同じ人々の集団を氏族あるいは宗族と言いますが、これが韓国人にとって最も基礎的な血縁関係ですから、国勢調査でも調査されたわけです。その結果、調査対象者のほぼ全員が姓と本貫をもっており、どこかの氏族に属することがわかりました。どの氏族でも、先祖には必ず両班がいます。すると、韓国の人々の大部分は両班の末裔だということになります。しかし、実態を見ると、大部分は明らかに農民や手工業者などの庶民です。彼らは100年あるいはそれ以上の時間をかけて身分上昇を果たし、朝鮮時代末期になると次第に士族の一族に潜り込んでいきました。その結果、ほとんどの韓国人が両班（実は士族）の一族だという意識を持つようになるのです。

朝鮮時代に3年ごとに全国一斉に住民調査が行われました。



講演会後の懇談会では来場者からの質問にも細かく答えていただきました。

その登録簿である戸籍台帳を追いかけてみると、時代が下がるにつれて常民と奴婢（つまり庶民）の数が著しく減少し、士族層の人口が激増していきます。地域によっては人口の過半数が士族層の人々だという数字が出てきます。虚偽の戸籍申告や様々な不正により、常民や奴婢が両班士族の仲間顔をするようになります。それが何代か続いた結果、現在見られるような韓国人総両班末裔現象が起きたのです。これは朝鮮時代から大きな問題になっていましたが、なし崩し的に事態は進行していきました。それが後世の人々の間に両班・士族について誤解を生む原因となったのです。変化が起き始めたころ、学識を持っていなかった人々は、戸籍などで身分上昇しても、ただちに士族になれたわけではありませんが、時間の経過とともに事が進み、庶民がいつの間にか士族たちの系譜である「族譜」の中に入り込んでいきます。こうして庶民が士族家系の一員だということになりました。ここに両班と士族の混同が加わり、韓国人がすべて両班の末裔であると意識する現象が起きるようになります。

●「学」こそ両班士族の根幹

韓国伝統社会は、正統な思想・学問とされた儒教と中国古典の「学」を身につけた士族が社会の最上層を形成していました。士族中で科挙に合格して「学」の力を認められた人々が官僚として国王を補佐し、政治行政を預かりました。これが本来の意味での両班でした。このような両班の実態と呼称範囲の変化について、時間軸の中で明確に認識することが韓国近世の歴史や伝統社会の理解には重要なのです。

PROFILE 吉田 光男（よしだ みつお）

1946年生まれ。東京大学文学部卒業、同大学院人文科学研究科博士課程修了。博士（文学）。

東京外国語大学朝鮮語科、東京大学文学部・大学院人文社会系研究科の助教授、教授を歴任し、放送大学教授・理事・副学長・図書館長。現在は東京大学名誉教授・放送大学名誉教授。韓国近世史研究を専門とし、1970年代から韓国にわたって文献資料と現地調査を続けてきた。近世都市と農村における集落構造、住民の社会関係、血縁と地縁、身分構造、ソウルの都市史的研究、商業と流通、交通、政治、東アジア国際交流など研究テーマは多岐にわたり、足繁く韓国に通う現代韓国社会ウォッチャーでもある。

主な著書に、『近世ソウル都市社会研究』（2009年、草風館）、『漢京識略』（訳註、2018年、平凡社）、『朝鮮史研究入門』（共著、2011年、名古屋大学出版会）、『日韓中の交流』（編著、2004年、山川出版社）など、主な訳書に、朴漢濟『中国歴史地図』（2009年、平凡社）、韓国教員大学歴史教育科『韓国歴史地図』（監訳、2006年、平凡社）、韓永愚『韓国社会の歴史』（2003年、明石書店）、金東哲『朝鮮近世の御用商人』（2001年、法政大学出版局）など。

日本の震災復興学と現場力：日韓協力のための新たな

2017年度に実施した「日韓新時代支援プログラム」により、2018年1月から3月までのおよそ2か月間、日本滞在研究を行った金映根先生に、今回のテーマの研究動機や滞在研究を通じて感じたこと、日韓関係の改善に向けた提言についてお話しいただきましたので、内容をご紹介します。

日韓協力の新たな分野として

日本と韓国との間では、政治経済、社会、文化、歴史といった分野で対立と協力の関係が繰り返され、特に歴史認識や領土、貿易といった分野では摩擦が深まることもありました。

そうした中で災難アジェンダに関する研究をテーマとしたのは、東日本大震災の発生を機に、日本の経済政策は変わるだろうという視点から、災害とTPP（環太平洋戦略的経済連携協定）の関連性に関心を持ったからです。

また、地震をはじめとする自然災害の多い日本で、災害学は、扱う学問領域も多岐にわたり、地理学から始まり、地質学、土木建築学、地球工学、経済学、社会学などの人文科学の分野までが範疇に入ります。分析レベルも多様であり、個人レベルの安全から、地域の安全、国の安全へと広がっています。

歴史的にも、多くの災害の中で日本が蓄積してきた災害ガバナンスや震災復興について関心を持つようになり、これらが日韓間での協力の新たな分野になりえるのではないかと考え、研究

を始めました。

2012年以降は、主に、日本の災害復興や災害後の経済政策などについて研究しながら、日韓の比較分析なども行ってきましたが、その最中、2014年春に韓国でセウォル号事故が発生しました。

この事故をきっかけに、韓国国内において東日本大震災の教訓への関心が高まり、事故や自然災害への対応といった災害論についての議論が高まり始めたのです。

今回、基金の支援を受けた滞在研究により、日本がこれまでの災害経験によって得た教訓を韓国でも紹介することで、東アジア地域の安全共同体を構築する礎となればとの思いも抱きました。

日本での現地調査を通じて

日本には災害や安全に関する研究成果の蓄積があり、これらを韓国に紹介することで、韓国社会全体が安全について目を覚ます契機となればとの目的もあります。

今回の現地調査期間中に、宮城県南三陸町で開かれた「第3回全国被災地語り部シンポジウム」に参加する機会を得ました。そこでの石巻市立大川小学校の被害者遺族へのインタビューは、被災地と研究者の乖離をどのように克服するか、さらにはどのように記憶と記録を後世に伝えていくべきかということを考えるきっかけにもなりました。

今回は、滞在研究の拠点を神戸に置いて調査を行いました。阪神・淡路大震災から23年が過ぎた今、災害に関する学術研究活動などはいったん落ち着いた印象を受けました。他方で市民の意識には、災害安全に対する考えがしっかりと根付いているという印象も受けました。

災害と災害の間を生きる私たち

東日本大震災以降、未曾有の複合的災害（大地震・津波・原発事故）の発生は、単に日本の国内問題にとどまらず、東アジア、ひいては世界的な問題として浮上しています。特に韓国では、セウォル号事故以降、2016年に起きた慶州地震、北朝鮮の核実験による白頭山の噴火の危険



4.16セウォル号事故後に筆者が企画し、『한겨레 (ハンギョレ) 21』と共同取材した特集「韓国の災害学を始めよう!」
『한겨레 (ハンギョレ) 21』第1014号、2014年6月9日

アジェンダ～安全共同体

高麗大学校グローバル日本研究院教授 金 暎 根

性や、原子力発電所の事故・テロの危険性などの他、MERS（中東呼吸器症候群）などの医療災害に関して、国という枠を越えた危機管理体制や災害学の土台作りが急務となっています。

このような状況下において、日本が東日本大震災や熊本地震の際に見せた、大災害発生時の社会的変動やリスク対応、復旧努力などの災害対応システムを韓国側が受け入れるには、日本との協力が不可欠です。

「災害学」という観点からの、 日韓関係改善に向けた提言

今後の日韓関係改善に向けて、何をすればよいのか。友好的な関係という共通の目標を定めて、そこに向かって進んでいくプロセスが何より重要と考えます。

日韓関係の悪化は、両国の経済や社会に悪影響を及ぼしかねません。さらなる関係改善が求められる中で、柔軟な相互主義を基調とし、未来志向的な日韓関係の構築と和解に向けて、次の点を提言したいと思います。

第一に、真の和解プロセスのための当事者ともなりえる新たな行為者と協力課題に注目しなければならないという点です。特に「災害と安全に関する科学技術・人文・社会の融合的協力ネットワークの構築」や「アジア災害・安全共同体構想」など、日韓交流の分野の拡大及び進展は非常に重要です。

さらに、日韓和解に向けたロード・マップを作成し、両国の和解のビジョンと戦略を共有しなければなりません。特に韓国の外交・安保及び経済政策は、相手国との対立と協力のプロセスにおいて、日韓関係を「競争のゲーム」から「協力のゲーム」にどのように発展させていくのかという「危機管理」の問題だと言えるでしょう。日韓関係改善、つまり日韓和解（平和）と関連した歴史的・文化的教訓を生かし、北朝鮮の非核化プロセスへの対応など、新たな協力を模索しなければなりません。この際、協力のゲームに転換できるかという観点から、我々が注目すべき論理は「政経分離の原則」だと思います。

第二に、「東アジア『災害・安全共同体』構築に向けた日韓協力の文化的土台」を作ることです。東日本大震災後、日韓間の共同危機管理体制の整備や災害専門家養成など、実践的な国際協力の模索が切実になっています。さらに東日本大震災の際の津波と原発・放射能問題をきっかけに、人道主義に基づく連帯といった意味での国際協力の模索が再び活発になっ

ており、東アジア諸国の連帯感形成の契機にもなっています。この先、韓国社会を襲うかもしれない災害に備えた対応策や克服方法を「制度的・政策的」に樹立するため、韓国と日本が「東アジア共同体的な立場」から実践方法を共同研究し、国際協力を模索することが必要です。

その方策の一つとして、例えば超国家的災害と安全問題に対応するグローバルな体制を構築し、そのためには人災を防ぐための人材を育成することが必要です。東日本大震災以降、日本から得た教訓の中でも韓国において急務な課題は、原発事故の発生を想定し、複合的な危機を管理する専門家の養成と共同危機管理体制の整備です。

「日韓新時代支援プログラム」による 滞在研究を終えて一新たな課題 のための研究機会の提供を！

微力ながら日韓関係改善のために力を尽くしてきましたが、未だに「近くて遠い国」という認識があるのも事実です。国交正常化から53年が過ぎた今、互いに他のどの国よりも、「近くて近い国」となることができるように、条件を整備し、関係改善のために努力していかなければならないと思います。

そのために、国の政策レベルにとどまらず、現場で交流する機会を提供する、日韓文化交流基金の研究及び交流支援プログラムは注目に値すると思います。人的交流に対するさらなる支援とその成果を共有していくことで、私の考える日韓安全共同体構想などの実践も、遠い夢ではないことを確信しています。

PROFILE 金暎根（キム・ヨングン）

1967年韓国生まれ。東京大学で博士号取得（国際関係論）、韓国・現代経済研究院、啓明大学校日本学科助教授などを経て、現在、高麗大学校グローバル日本研究院教授、社会防災安全研究センター長を務める。

専門は日本の外交・通商政策、国際政治経済論。

主な著書に、「韓国の震災学／災害学：失われた災害ガバナンス20年」『震災復興学：阪神・淡路20年の歩みと東日本大震災の教訓』（ミネルヴァ書房、2015年）、「災害後の日本政治経済システムの変容—関東・戦後・阪神淡路・東日本大震災の比較分析」鎌田薫監修／早稲田大学震災復興研究論集編集委員会編『震災後に考える：東日本大震災と向きあう92の分析と提言』（早稲田大学出版部、2015年）



フィールドワークと文化交流

東京大学名誉教授／日韓文化交流基金評議員 伊藤 亜人

1972年に韓国全羅南道の珍島を訪れ、農村に住み込んで始めたフィールドワークは、私の韓国研究においてもっとも貴重な出発点となった。今もその時のことを思い返しながら、毎年訪ねるのを楽しみにしている。

人類学のフィールドワークでは、学術を目的とするとはいえ自分の生活と切り離すことができない。また、たった一人で始めた現地調査とはいえ、日韓の文化交流を自ら体験していたといってもよい。研究を目的に掲げると、研究以外のことに目をそらすことを自制するのやむをえない。とりわけ、制度的な支援を受けたり、期限内に一定の成果を求められたりすると、気持ちに余裕も欠けがちとなる。しかし、研究のためとはいえ、若い時分に現地で過ごす一年二年は、二度と体験できないかけがえないものである。



晩秋の村の全景

フィールドワークとは現地の人たちとの交流にほかならない。当時の韓国については観光案内の小さな冊子があったものの、すこし足を延ばそうとすれば、頼りになるのは自分の身体と感性しかなかった。先行研究と言える本格的なものもまだ無く、手引きや案内書のようなものも無かった。

国交が正常化してまだ数年しか経たない当時、地方では日本人に触れることはまだ少なかったし、私の住み込んだ村には、昔も日本人が訪ねることはなかったようである。一度限りの旅行者や行商人とは違って、長期にわたって研究を続けて行こうとすれば、研究以前に何よりも地元の人たちとの信頼関係が欠かせない。そのためには、自分のありのままの姿をさらけ出して現地の人たちと生活を共にしながら、少しずつ信頼を積み上げてゆくより外ない。しかし、環境が何もかも異なると、自分でも気づかぬうちに緊張し萎縮してしまうようで、それが体調に

も響いてくる。私自身も、藁ぶき屋根の下でのランプ生活や農作業に明け暮れる生活は日本で経験がなかったので、民俗学の書物に描かれた生活にタイムスリップするようだった。都市と農村の生活には雲泥の差があったが、私にとっては、むしろすべてが新鮮で魅力的だった。単調な村の生活に闖入してきた日本の若者に誰もが好奇心を寄せ、私は見物と娯楽の対象となった。控えたつもりでも日本の若者に対して遠慮のない村人たちに囲まれ、いつも適度の緊張感の中で過ごしていたが、その一方で、日本と韓国の接点に自分が立ち会っているという充実感も密かに味わっていたように思う。

人類学の研究において、フィールドワークの成否は地元の人との関係、とりわけ友人に負うところが大きい。といってもすべての研究者がそうした友人に恵まれるわけではない。それは運命的な出会いともいうべきもので、私の場合、1972年に初めて出会った友人が、40年以上経た今日まで最も信頼できる友人となっている。研究の目的や意義を完全に理解してくれる友人を得ることができれば、何事も解決されるといってもよい。それは研究ばかりではない。日本人と韓国人が互いにたった一人でもこうした友人を持つならば、当然ながら日韓関係もすべてうまくゆくに違いない。

こうしたフィールドワークの経験を日韓の文化交流に何とか生かせないものだろうか。私はその友人と相談しながらいろいろ試みた。鹿児島県の「からいも交流」との青少年交流、長崎県鷹島との水産養殖に関する交流、長崎県五島との観光振興に関する交流、珍島における住民主導の祝祭による地域活性化、韓国と日本の大学生合同のフィールド踏査と交流、私が企画し募集した珍島文化ツアーなど、いずれもまだ当基金が発足する以前のことだった。鹿児島との交流は相互訪問とホーム



脱穀作業の様子。当時は日本製の足踏み脱穀機が健在だった。

ステイから中学生の交流さらには家族間の交流に広がり、参加者たちはその後も地元珍島で文化交流のボランティアとして活動している。鷹島および五島福江との交流は、行政を巻き込んだため思わぬ壁に当たってかえってうまく行かなかったが、住民主導の地域祝祭、日韓学生のフィールド踏査、市民を対象とした三度の文化ツアーなどの企画は、地元のボランティアや村の人たちの協力を得て順調に運んだ。



子守りをする女の子

フィールドワークが秘める魅力と可能性として、何よりその臨場性、個人の主体性と行動、現地の人との個人的ふれあい、生活者の感性などが明らかだが、これをどのように日韓の文化交流に生かすかが課題といえよう。研究者のフィールドワーク経験はあまりにも個人的なものであるが、学生たちにフィールド体験を味わわせる試みは、大学の教科にも一部ではあるがすでに取り入れられている。また市民によるワークショップ形式の企画の中でも、臨場性と生活者の感性を生かすための試みとして、地域の文化的な行事や祭りなどに参加する例もみられる。祭りなどの伝統行事は特定の日に限られているが、非日常的な晴れの舞台は参加する者にとって魅力的であろう。しかし、こうしたもの以外にも、地域を受け皿として、身の回りの伝統産業や生活文化を手掛かりとすることで、フィールドワークの魅力を体験できるような企画も可能であろう。

観光旅行では、観光名所や名物についてガイドブックやネットが用意されていて、事前におよその情報を得ることができる。近年ではそうした情報が充実したあまり、観光客も安易にそれに頼ってしまう傾向も目を引く。現場に着いたなら片言の韓国語や日本語で道を尋ねたらよいものを、地元の人に直接声をかけるでもなく、しきりにスマホをのぞき込む人が少なくない。人との触れ合いまでも避けてしまうとすれば、スマホの便利さがむしろ交流にとって妨げになるかもしれない。しかし一方では、ネットに配信されていないような何気ない生活の中に魅力を発

見するのだと言うリピーターも増えている。フィールド体験の魅力と可能性を伸ばすためには、スマホに代って地元の人たちとの対話が欠かせず、そのためにはボランティアの参画も効果的である。

一定のコースと目標を設定して、誰もが個人で参加できるものに「お遍路」がある。遍路の趣旨はもともとは弘法大師の足跡を追体験するもので、参加する動機は元々個人的で精神的なものである。しかし、こうした方式に倣って、もう少し地域の生活や文化伝統に触れたり追体験したりできるようにして、文化交流の性格を併せ持つようなものがあればと思う。四国の「お遍路」では、これを迎える地元の人たちが、ささやかな奉仕でもてなすことが地域の生活に根を下ろしてきた。こうした「御接待」に相当するものとしてボランティアの参加を取り入れた文化ツアーも試みられてよいだろう。

このように交流の在り方については、新たな魅力ある企画を取り込んでいく態勢が求められよう。そうした魅力を探ることで新たな企画を提案することをテーマとして、地域の人々も含めた参加型のワークショップを行なうなら、それも交流そのものといえよう。



ランプの明かりのもと、婦人たちが屋根葺き替えの準備作業を行う

(1972年 全羅南道珍島郡臨涯面上萬里、4点とも筆者撮影)

PROFILE 伊藤 亜人 (いとう あびと)

1943年生まれ。東京大学教養学部卒業後、同大学大学院社会研究科修士。東京大学助手、助教授、教授を歴任。その後琉球大学や早稲田大学でも教授を務め、現在は東京大学名誉教授、日韓文化交流基金評議員。特に韓国の農村を中心に社会組織、契、宗教・信仰と儀礼、儒教と教育、歴史観、物質文化、移動と都市化、祝祭と地域振興などに関する現地調査を行う。現在は主として北朝鮮社会における民衆の生活実態について調査研究に取り組む。著書には、『北朝鮮人民の生活―脱北者の手記から読み解く実相』（2017年、弘文堂）、『珍島―韓国農村社会の民族誌』（2013年、弘文堂）など。

気持ちが通じることの喜び

2017年度日韓学術文化交流事業訪韓団（第2団）参加者 新潟県小千谷市立片貝中学校（訪韓当時）教諭 小倉 愛未

訪韓研修を通して改めて思ったことは、「言葉が通じなくても気持ちは通じることがある」ということだ。言語や文化の異なる人と気持ちが通じると、大きな喜びが感じられる。相手と一つの体験を通して心の距離が近づくことがある。交流したいという前向きな気持ちがあれば、気持ちが通じる機会も増えると感じた。

今回の様々な研修プログラムの中で最も心に残ったものは何だろう。どれもたいへん有意義だったので選ぶのは難しい。ホームステイ先の家族とエパーランドという遊園地へ行った。そこでTエクスプレスというジェットコースターに乗ったのだが、ホストファミリーのお父さんが「TエクスプレスのTはトップのTなんだ。速さも高低差も韓国のトップ。きっとこの訪韓の中で一番の思い出になるぞ」と茶目っ気を含んだ表情で言った。訪問する先々で感激の体験を重ねてきて、ジェットコースターが一番の思い出になるなんて冗談だろうと思っていた。しかし、本当に一番の思い出になってしまったようにも思う。それくらい強烈な体験だった。日本のコースターはゆっくり傾斜を上がり恐怖心を煽られるが、韓国のコースターは初めから速いスピードで発進し、傾斜もぐんぐん進む。途中何度も体が宙に浮いた。後半私は「もういい！早く終わって！」と口にしてた。二度と乗りたくない。だが、終わった後の安堵感はひとしおであったし、興奮を共有してホストファミリーと心の距離が縮まったように思う。遠慮が一気になくなった。



ホストファミリーの姜さんのご家族と（写真下段左側が筆者）

それにも増して、やはり学校訪問の思い出を記さずにはいられない。最初の学校訪問先の松北小学校では、私は2年生の教室で給食を食べて昼休みを過ごした。児童には日本語も英語も通じず、私は途方に暮れたが、子ども達は韓国語が通じない私に、めげずに韓国語でたくさん話しかけてくれた。ある児童は韓国の伝統衣装を着た女の子の人形を、また別の児童は1本で色々な色が出る珍しい鉛筆を見せてくれた。言葉は通

じなくても熱心に話しかけてくれる子ども達に、私も「何、何？」「かわいいね」「すごいね」と日本語で返した。休み時間はあっという間に終わってしまった。子ども達は人形と鉛筆を私に再び差し出してきた。「もしかして私にくれるの？」と日本語で言うのと大きくうなずいた。私はとてもうれしくて喜んでいると、子ども達は誇らしげな表情を浮かべていた。

また東栢中学校での昼休み、日本語が話せる生徒がいて、その生徒に通訳してもらい、生徒達と交流していた。日本から持参したひらがなの名前シールを出すと、さらに生徒達が集まってきた。「アリガトウ」「アイシテル」など知っている日本語を元気に返してくれてうれしかった。

ハンイル高校では小グループで生徒と意見交流をする時間を設けていただいた。私のグループでは「世界の中で日本が一番好きな国です」と語る生徒や「日本のこういうところが嫌ですが、それ以外は好きです」と言う生徒、好きでも嫌いでもないと言う生徒がいた。本音を語ってくれたのかなと思う。それも嬉しかった。



日本で姜さんと再会を果たして

児童生徒、先生方、ホストファミリーの皆さんと交流の中で、気持ちが通じてうれしいと感じる場面が多くあった。かけがえのない財産になった。この体験を周りの人たちに語り、日韓の友好関係の構築に生かしていきたい。

私たちの訪韓から10か月後、ホストファミリーの姜さんが韓国からの訪日団で来日した。連絡を取り合い東京で再会を果たせた。姜さんを友人に紹介し、交流の輪を広げている。

PROFILE 小倉 愛未（おぐら まなみ）

新潟県見附市立見附特別支援学校勤務。多様性を認め、互いを尊重し合う共生社会の実現を目指し、高等部生徒の進路指導に力を入れながら、地域で自分らしく豊かに生きるために必要なことを日々研究している。

訪韓を通して学んだこと

2017年度大学生訪韓団（第1団）参加者 立命館大学生命科学部応用化学科4年（訪韓当時）

出石 佑樹

今回の訪韓団を通して、韓国の文化や食生活、彼らの考え方、お互いの国の共通点など、普段の生活ではなかなか学ぶことができない様々な経験をすることができた。中でも、特に印象的であった現地学生との交流を通して見えた、学生たちの生活について述べたい。

訪韓日程中、韓国の学生とさまざまなことについて話し合う機会があった。中でも特に驚いたのは、韓国の学生たちが、留学やワーキングホリデーにとても積極的であるということだ。日本であれば文系の学生は、留学に行くのが普通であるとしても、私のような理系の学生はほとんど行かない。

一方、韓国の学生は文系理系と分野を問わず、多くの学生が留学に行くそう。その背景について尋ねたところ、「周りの学生の多くが海外に行くので自分も行かなければ、置いていかれそうな気持ちになってしまう」のだそう。私は、この点について強く共感した。今や多くの情報が英語で発信され、英語を使っただけの情報交換が当然の時代となった。今後、理系人材は日本にとどまらず、海外に向けて発信していく必要がある。そういった状況を踏まえると、このままでは、日本人学生は世界標準の技術に追いつけないのではと感じた。

さらに、学生生活に関して、印象的だったのは、韓国の大学には、ROTCという予備役将校訓練課程があるということだ。この制度のことを知り驚いた。この制度は、大学に通いながら専攻科目を学び、同時に2年間の軍事教育を受け、幹部候補として必要な軍事的な知識を習得していくというものである。

実際、そのある一定の期間の軍での任務を終えた後は、職業軍人として働くか、一般人として働くかを選ぶそうだが、多くは一般人として働くことを選ぶそう。このことを聞き、日本の防衛大学校とは異なり、徴兵制がある韓国ならではのシステムだと感じた。この制度で軍での任務に就くと、給与面で優遇を受けたりすると聞いて、日本で問題になっている奨学金による破産問題の解決の糸口になるのではと思った。

私は、今回の訪韓で学んだことを次のように生かしていきたいと思う。一つ目は、韓国と日本の架け橋として情報交換を担っていきたいと考える。これまで私は、韓国に対して偏見を抱いていたが、実際の韓国は自分の考えとは大きく異なった。むしろ日本と似ている点が多く存在した。例えば、政治的な関係の上では、両国が対立することもあるが、国民はそれぞれの国に対して、それほど悪い印象を持っていなかった。また、韓国の学生たちの日常の過ごし方も印象的であった。友達同士で一緒にお酒を飲んだ後、カラオケに行くと聞いて、日本の学生と変わらないのだと感じた。

二つ目は、韓国を実際に訪れなければ体験できないような情報を発信していくとともに、知り合った韓国の友達と密に連絡を取り合い、良い関係を築いていきたいと考える。将来的には、様々な大学の学生や異なる専門分野の学生と連絡を取り合うことで、今後の日韓の友好関係や、将来のビジネスのきっかけになればいいと思う。

三つ目は今回、韓国で受けたもてなしの心を、違う形で社会に還元していきたいと考える。訪韓中は、現地の学生や先生方、ホストファミリーや地下鉄の駅員さん、道に迷っていた私を助けてくれた韓国の街の人たちなど、いろいろな人に助けをもらい、とても幸せな気持ちになった。今度は、この幸せな気持ちを他国からの外国人観光客の方々に還元できたらと思う。街で困っていそうな人がいれば積極的に声を掛け、大学内や研究室の留学生に、日本の歴史や文化、作法など様々なことを教えて日本のことを知ってもらい、日本で良い思い出を作るためのお手伝いができれば良いと思う。そしてゆくゆくは、このおもてなしを受けた人が、さらに多くの人に幸せを分け与えていくという、幸せの連鎖を作る手伝いをしたい。



東義大学の大学生達との交流にて（写真中央上が筆者）

PROFILE 出石 佑樹（いずいし ゆうぎ）

現在は、京都大学大学院農学研究科修士課程在籍。植物の二次代謝産物についての研究を行う。大学入学後に国際交流に興味を持ち、韓国をはじめインドなど様々な国と地域の学生と交流してきた。今後は研究を通して国際貢献するのが目標。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2018年度第1四半期（2018年4月1日から6月30日まで）の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期 間	主な訪問先
日韓学術文化交流事業 訪日団（第1団）	趙庭浩（チョ・ジョンホ） ソウル孔硯小学校校長	20	9	11	6/5～ 6/14	調布市立深大寺小学校、飯田市立座光寺小学校、 山梨県（都留市、甲州市、北杜市）、長野県（飯田 市、松本市）富山県中新川郡立山町、岐阜県（大野 郡白川村、高山市）
日韓学術文化交流事業 訪日団（第2団）	張錫永（チャン・ソクヨン） 君子小学校校長	20	10	10		
日韓学術文化交流事業 訪日団（第3団）	琴得鉉（クム・ドゥクヒョン） 養英デジタル高等学校校長	20	5	15		
日韓学術文化交流事業 訪日団（第4団）	李成洙（イ・ソンス） 松内高等学校校長	20	5	15		
韓国大学生訪日団 （第1団）	張原暢（チャン・ウオンチャン） 国立国際教育院 教育研究士	20	7	13	6/26～ 7/5	神田外語大学、高知県立大学、立命館大学、高 知県（高知市、幡多郡黒潮町、四万十市、須崎 市）、京都府（京都市、宇治市）
韓国大学生訪日団 （第2団）	李智淑（イ・ジスク） 国立国際教育院 教育研究士	20	8	12		
韓国大学生訪日団 （第3団）	安性垠（アン・ソンウン） 国立国際教育院 教育研究士	20	7	13		
韓国大学生訪日団 （第4団）	金圭洙（キム・ギュス） 国立国際教育院 教育研究士	20	7	13		

日韓学術文化交流事業訪
日団（第1～2団）調布市
立深大寺小学校を訪問



日韓学術文化交流事業訪
日団（第1～2団）飯田市
にてホストファミリーとのお
別れ



日韓学術文化交流事業訪
日団（第1～4団）そなエ
リア東京にて日本の防災対
策について視察



日韓学術文化交流事業訪
日団（第3～4団）稲沢市
にて華道体験

韓国大学生訪日団（第1～2団）神田外語大学にて韓の学生同士交流を図る



韓国大学生訪日団（第1～2団）幡多郡黒潮町にてかつおのたたき作り体験



韓国大学生訪日団（第3～4団）福岡市の株式会社やまやコミュニケーションズ本社工場を見学



韓国大学生訪日団（第3～4団）北広島町の伝統芸能「芸北神楽」を体験

② 理事会・評議員会開催

6月6日に第77回理事会、6月22日に平成30年度定時評議員会が開催され、平成29年度決算が承認されました。

③ 日韓文化交流基金賛助会員制度

日韓文化交流基金は1983年の設立以来、両国国民間の相互理解と信頼を深めるため、青少年交流をはじめ数多くの事業を実施しております。こうした活動のために、当基金では賛助会員制度を設け、趣旨にご賛同いただける多くの方々のご支援を賜りながら、更なる事業活性化を図っております。

2017年度賛助会員リスト

（五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数）

●特別会員（計5名、1団体）

小野正昭(3) 金春美(3) 中江新(5) 檜崎正博(3) 渡辺浩(3) 広島県日韓親善協会(3)

●個人会員（65名）

青野正明 朝海和夫 朝倉敏夫 浅野豊美 安倍誠 阿部孝哉 飯島渉 石川武敏 磯崎典世 稲葉真岐子 李炯喆 林在圭 内田富夫
梅田博之 大竹洋子 荻野綱男 小倉紀蔵 生越直樹 河村建夫 菅野修一 姜英淑 木畑洋一 木宮正史 小泉勇治郎 小林直人
小針進(2) 高麗文康 齋木崇人 坂井俊樹 阪田恭代 酒匂康裕 櫻井浩 佐藤俊行 鮫島章男(2) 澤岡泰子 柴公也 上保敏
白川豊 杉山長 高田加代子 田中正敬 都恩珍 中尾美知子 中塚明 中山隆夫 中山めぐみ 芳賀徹 社会福祉法人陽清学園 畠山悦美
波田野節子 墨の美術館 濱崎道子 浜之上幸 日本民芸館館長 深澤直人 福原裕二 藤田昭造 藤本幸夫 堀泰三 馬延延
前田二生 實生泰介 茂木敏夫 山口晃 尹明憲 余田幸夫 柳震太 和田とも美

●法人会員（2団体）

学校法人城西大学(10) 和光物産株式会社(5)

▶ 2018年度 韓国との間の招へい・派遣事業 実施団体選定に関する企画競争公募採用案件一覧

今年度も青少年交流事業の一環として、韓国との間での招へい・派遣事業を実施する団体を対象に、企画競争公募を実施し、下記のとおり、招へい事業6件、派遣事業1件を採用することが決定しました。

招へい事業

事業名	申請団体	開催期日	招へい人数
「第25回日韓高校生交流キャンプ」	一般社団法人日韓経済協会	7月29日～8月2日	35
福島韓国交流訪問団	福島を正しく伝えよう！実行委員会	8月20日～29日	25
JENESYS2018 韓国大学生招へい・交流プログラム「つなぐ」	公益財団法人大阪国際交流センター	11月2日～11日	20
対日理解促進交流プログラム「JENESYS 2018」 韓国青年招へい事業 「食の安全・日本食の魅力体験」	一般財団法人日本国際協力センター	11月5日～13日	22
水原市大学生訪日事業	静岡市国際交流協会	1月16日～25日	20
JENESYS2018 韓国高校生の九州における 日韓歴史文化交流探訪	学校法人福岡女学院	1月17日～26日	22

派遣事業

事業名	申請団体	開催期日	派遣人数
北海道150年記念「生涯スポーツで街を元気に！ 地域づくり魅力発信事業」	公益社団法人北海道国際交流・協力総合センター	11月21日～30日	22

▶ 2018年度「発信力を有する知日・知韓家育成事業」 採用案件一覧

本事業は、日韓両国の世論、相手国に対するイメージの形成等に影響力を持つ諸分野の有識者、オピニオンリーダーを対象とし、両国国民間の友好・協力関係促進に関する取組をテーマとした滞在研究を支援するもので、下記の2名に支援することが決定しました。

氏名	所属機関	職位	研究テーマ
吉熾宇	eToday Media	顧問 シニアアドバイザー	朝鮮半島と東北亜地域の持続的平和のための日本の役割
李成権	東義大学校	会計学科兼任教授	日韓関係発展のための政治・経済人の交流方案



タイトル：「清見寺とサッタ峠」
作者：朴宣映（パク・ソンヨン）

2014年ユース朝鮮通信使訪日団として、静岡の清見寺を訪れた際に、地元の方たちが朝鮮通信使の姿に扮して歓迎してくれた様子を、韓紙に鉛筆画で描きました。
訪日当時は弘益大学校絵画科4年に在籍していましたが、現在は映像シナリオライターとして活動しています。